百年の不体裁
――現代中国のトイレ革命

周 星
ZHOU Xin
翻訳：西村 真志葉

はじめに

中国語で日常生活のこまごました平凡さを表現する際、「柴・米・油・塩・醤油・酢・茶」、「衣食住行」、「食う・飲む・出す（排泄）・寝る」といった決まり文句がよく用いられる。こうした定型句は、排泄やトイレ、またそれらと関連する問題に対する人々の姿勢を如実に映し出す。それは通常まったく意に介されないものの、避けては通れぬ日常生活の一部だと受け止められているのだ。清朝時代末期、民国時代初期以降、中国人の排泄行為およびトイレに関する状況は諸外国から非難を浴び続けてきたが、中国が長年頭を抱え続けたこの問題も、2010年にようやく転換の時を迎えたのだった。

現在に至るまで、排泄行為やトイレ、トイレ革命及び関連する諸問題について、中国の民俗学、文化人類学といった分野では、一部の調査報告が断片的にとりあげる程度であり、まともな研究は行われていない。したがって、本稿では現代中国で生じたトイレ革命、それも局部的に現実となりつつあり、そして今なお進行し続けているトイレ革命について概要を取りまとめ、それが現代中国の大規模な生活革命の重要な一環であるという視点を提示したい［周星 2017］。排泄行為や排泄物、トイレに関する問題を単に衛生問題として扱う場合に比べ、筆者はそれらをより複雑な総合的背景を有する現代中国の社会的・文化的問題として位置づけている。以下、本稿で使用する概念をいくつか説明しておこう。まず、トイレ文化とは、すべての社会に存在する排泄物処理と排泄行為の管理に関する規則と施設などを指し、またトイレ文明は排泄行為と排泄物処理をめぐる約束、宣伝といった面において、ある社会が達した科学技術レベルと社会的整備の高さを指す。一方、トイレ問題とは現代中国でトイレをめぐり顕在化する諸問題の総称であり、トイレ革命はある社会が自発的な内的衝動に基づいて、あるいは外部に刺激される形で、その排泄行為の管理や排泄物処理施設、さらに関連システムについて実施する一連の改造措置の総称である。ここからも明らかなように、トイレ革命という概念には、人々の排泄行為の変化や、トイレ文化の変容、トイレ文明水準の向上などが含まれており、すべての人にとって清潔、衛生的、快適、安全、且つ尊厳が保たれ、利便性の高い排泄環境を志向するものである。

1. 農耕文明のトイレ文化

文化の異なる人々の間には、異なる排泄の仕方が存在し、また排泄物の管理や処理の方法をめぐってもそれぞれの特徴を示すことだろう。中国のような広大な土地においても、トイレ及びトイレ行為の形やその文化形態もまた均一ではない。たとえば草原や森林、山地で遊牧、遊猟、遊耕を営む民族集団は、一般的にトイレを設置しない、あるいは固定されたトイレを持たない場合が多い。しかしこれは彼らが排泄行為についてルールを有していない、あるいは衛生観念が欠如していることを意味しない。単にその生存環境下では人畜の糞尿が問題視されないというだけの話である。西南の山地で農耕を営む一部の少数民族には、人の糞尿を肥料に用いることを禁じる事例が見られる。彼らは自分たちの土地が、人の糞尿を肥料に用いる漢族のものと比べてより清潔だと考える。たしかに、典型的な農耕民族である漢族は、その農耕文明の特徴として、人や家畜の排泄物を農作物の肥料に用いる場合が多く、そのため肥料としての糞尿が重要視されている。これは中国で最も一般的かつ伝統的なトイレ文化といってよい。たとえば西洋の水洗式トイレと比べると、中国には汲み取り式のトイレが多い。具体的な排泄の仕方も、西洋の洋式とは対照的に、東南アジアの多くの国と同様、和式スタイルが多く見られる。しかし、中国内の諸民族も他のさまざまな民族同様、子どもの社会化に似た過程の途上にある。排泄行為の自制、排泄物への嫌悪などを含む飲食・排泄・睡眠関連の文化的規範の生成が促されているのだが、実際、人類のあらゆる社会において、こうした人体の自然な属性は例外なく隠され、装飾されるものである[奥尼尔2010：10、英格利斯 2010：31-37]。

中国におけるトイレの歴史は古い。『説文』にも「厠、清也」とあり、汚物や穢れをきれいに取り除くことと反訓が与えられている。秦漢王朝時代の溷と圂という漢字には、ブタの飼育柵とトイレという二重の意味があり、漢晋王朝時代の出土品のなかにも、豚の飼育柵とトイレの機能が一体化した様子を模した素焼き模型の埋蔵品が見られる。このような形態のトイレは近代に至るまで、中国北部、華南地区及び日本の沖縄等に存在していた。一部の研究者は、漢王朝時代のトイレがすでに個人のプライベートを重視し、かつ換気を考慮した設計になっており、唐時代に至ると司厠という官職が創設され、宋時代の汴梁（現開封市）には公衆トイレがあり専門の管理者も置かれ、さらに清王朝嘉慶年間には有料トイレさえも登場した、と力説する。だが、現在に至るまで、中国の広大な農村地域ではいぜんとして露天の汲み取り式トイレが多く、人の糞尿が肥料として用いられている、という基本的事実に変わりはない。

アメリカの葛学溥が1925年に出版した『華南の村落生活』のなかで、鳳凰村の人々の「限られた衛生知識は伝統と迷信という非科学的事実に基づく」と述べている。たとえ比較的清潔な部屋であってもゴミや汚水、蓋のない桶に入った糞便がいたるところで見受けられ、また、農民たちは毎日溜池から液状の糞便を汲むと、村を通って田畑へ赴いて農作物に肥料をやる、さらに生活用水となる鳳凰渓の水で便器を洗うのだという[哈里森、葛 2006：53-54]。

楊懋春は山東省台頭村の民俗誌において、トイレやその関連事項に多く言及している。「露天トイレは農民の健康を脅かしている。夏はトイレに蝿がたかり、同じ蝿が食物の上へとまるが、それをさえぎる良い術がない」、「台頭村の農民は――その他多くの村の農民も同様だが――すべての飲用水を煮沸し、食物も中までしっかり火を通す」[楊懋春 2001：42-43]。これとよく似た情景は、中国各地の田舎でよく見られる。

1942年、許烺光はコレラ蔓延の危険に瀕した滇西北の農村（西城）において、コミュニティの浄化を主旨とする打醮などの儀式に詳細な考察を行った。そして、疫病の危険性に面した人々が、

宗教的な浄化儀式と現実的な衛生行為を組み合わせた手法をとっている、と鋭く指摘した。これにはコレラ予防の薬品散布や薬剤投与だけでなく、道徳や戒律の順守の勧告などが含まれる。例えば、現地の警察が「各種動物の放し飼いを禁止、場所を選ばぬ大小便禁止、ごみのポイ捨て禁止、違反者は打ち殺しても罪に問わず」と公示を出し、同時に某コミュニティの長老は「祈り、禁欲し、堪えがたい穢れを禁ず」と戒告している。人々は現地の教会、学校、病院で行われるトイレ内外の消石灰粉末による消毒法を基に（こうした情景は1940年代から1960年代の中国で普遍的に見られた)、住宅前に消石灰粉末で半円を描いて病魔を遠ざけるという新たな試みを行った。普段、彼らは道路はおろか自宅前さえろくに掃除しないが、非常時においてはごみのポイ捨てやトイレ以外での排泄行為などを禁じる公共道徳の忠告を受け入れることができるのである［許烺光 1997：35-43］。

東南アジア諸国を見ても、近代化以前の京都や江戸、ソウル、開封、広州等人口が密集する都市部では、そこに暮らす住民の糞尿が、周辺村落の人々に必要とされていた。郊外の農民はさまざまな方法を講じて、都市部の人々の排泄物を持ち帰り、肥料とせんとしていたのである。その後、たとえば日本では戦後1950年代以降、化学肥料の普及により人の糞尿は経済的価値を失い、1960年代に各地で排泄物処理場の建設が進んで化学的な処理が施されるようになった。そして1970年代から1980年代にかけて下水道と水洗トイレが普及していったのである［阿南 2010：405-421］。ところが中国では、首都北京を例にしても、ようやく汲み取り工という職業が淘汰されたのは1990年代末のことだった。

江南地域にはかつて室内用の糞壺で用を足す習慣が存在していた。毎朝女主人が小川で糞壺を洗った後、玄関に干すのである。汚物は普通直接川に流されるため、公共衛生を大きく阻害していた。現在では科学的な衛生知識が普及し、田舎の民家であっても水洗トイレが増えており、上記のような伝統的な糞壺は日常生活から姿を消している。とはいえ、当地の婚礼において子孫桶と呼ばれる糞壺は欠かせない嫁入り道具である。糞壺が生殖を象徴する婚礼上のメタファーになっているためであり、ここからも民俗の世界ではそれが穢れと見なされていないことが分かる。中国の民俗文化にも厠神が存在するが、彼女はトイレ、ましてや衛生面を管轄しない。彼女はあくまで「諸事を占うことができる」、「蚕で未来を占う」女神である。

2. 文明形態の転換と外部世界から寄せられる非難

各国の人々からさんざん非難が寄せられる中国のトイレ問題は、中国社会が農耕文明から工業文明へ、郷土社会から都市化社会へ向かうさなかで出現した。筆者がこのように考えるのには理由がある。伝統的なトイレ文化は農耕文明を背景に農村地域をその拠点としてきたが、現代化の過程で新たな文明形態である工業文明、都市文明がもたらされた結果、中国では文明形態の転換が生じた。まさにこの転換のなかで、トイレは重大かつ深刻な問題とならざるを得なかったのである。1950年代以降、中国の化学肥料工業は急速な発展を遂げ、さまざまな形態の化学肥料と農薬が農村部に普及したことで、有機肥料に対する農家の依存率は大幅に減少していった。

ただし、中国の農村部において、農民たちは肥やしを頼みの綱にしており、化学肥料についてはまだ完全に受け入れてはいない。短期的な効果を見れば、有機肥料は化学肥料には勝てないだろう。だが、各地には「化学肥料は土地を硬化させるので、有機肥料によって柔らかく解さなければならない」といった説が広まっており、2種類の肥料が混在する現状を招いている。また、町

と郊外の農村部の間にかつて存在していた人の糞尿をめぐる需要と供給の関係にも、瞬く間に変化が生じた。北京ではおよそ1970年代から1980年代中期の間に、人々の排泄物が郊外の農村部に必要とされなくなり、すべて下水処理を施さなければならなくなった。一方の農村では都市部と同じ速度で下水処理システムを整備することができないため、都市・農村間の格差はトイレと排泄物処理の面においてもさらに際立つこととなった。

改革開放以降、中国の都市化の動きが広がるなかで、トイレ問題も次第に顕在化してきた。都市化がもたらした極度の人口密集化により、糞尿処理が市政の一大問題になったわけである。また、中国の都市部に特徴的な流動人口は、もともと厳しい状況に置かれていた公衆トイレ問題をさらに深刻化させることになった。北京、上海、広州といった大都市の転入人口や流動人口は増大する一方であり、数に限りのある公衆トイレはまったく足りていないのが現状だ。と同時に、都市管理の水準もいぜん低く、その衛生状況は文字にするのもはばかられる様を呈している。

こうしたトイレ問題は社会の発展段階に抵触し、社会経済の発展という課題全体の一環をなす複雑な特徴を有している。またそれ以外にも、同時に、たとえば都市・農村間の2層構造のような中国特有の社会構造とも関連している。現在人口が密集する中国の各都市では、家庭のサニタリールームに配備された水洗式トイレと外出時に用を足せる公衆トイレが必要とされているが、いずれの設備も下水道や汚物処理システムが完備されていることを前提としている。現実には、公衆トイレのおもな利用者は都市社会を生きる下流層であり、たとえば衝衝居住者、いまだ安定した住居を持たない転入者、流動人口および出稼ぎ農民工等が含まれる。メディアと大衆は公衆トイレの衛生状況を批判し、利用者の公共道徳の欠如を叱責するが、両者は同義的なものであり、また、その批判の矛先が公衆トイレの管理上の問題に向けられることも少ない。「社会転換の過渡期においては、人々の観念と（排泄）行為が、都市社会の文明的な生活形式が要求する水準に満たない」、というのが一般的な解釈である。たしかに中国では、家庭の私用トイレと比べて、公衆トイレの問題により複雑な意味が含まれている［仲富蘭 1990：201-208］。

現代の中国が抱えるトイレ問題には、多層的な格差が含まれている。それは他地域の人間や地方人口に対する都市の拒絶と排除を表出するかもしれない。たとえば、都市の公共サービスや政府、企業を含む多くの基本施設では、トイレを一般大衆に開放する義務を放棄している。またこれは同時に、都市・農村間格差の一つの側面でもあり、差別と優越感の根拠を形作ってもいる。こうした中国のトイレ問題について、より大きな声で批判の声を上げるのは中国へやってくる諸外国の人々、そして海外メディアである。

1978年の改革開放を機に、海外の観光客が中国へ押し寄せた。現代的な都市あるいは工業化社会で暮らす観光客が、いぜん農業国家のままであった中国を訪れたわけだが、彼らは先進国のまなざしで第三世界に属するこの発展途上国を観察し、トイレ問題に遭遇した。あるいは、中国のトイレで驚くべき発見をし、非常に居心地が悪い思いをした。これは決して不思議なことではないだろう。1980年代から1990年代にかけて、中国のトイレはしだいに外国人記者に取り上げられる恰好の題材となり、1990年代初頭までに、中国都市部のトイレ問題を批判した国内外の報道機関は数百を超え、報道されたニュース記事も膨大な数に及んだという［娄暁琪 2015］。こうした批判記事は中国人読者に大いに恥じ入らせたが、国営メディアである新華社は同類の記事を『参考消息』上で多数翻訳、紹介を続けた。こうした批評は、直接あるいは間接的に、中国国内のトイレ改良に係る努力の後押しすることになったのである。比較的早い時期に中国で行われたトイレ改良は、全国各地の観光地や観光ルートで比較的体裁のよいトイレを整備し、トイレに等級づけを行う、というものだった。一時、観光旅行の体系的な業務というのは、観光客の行動を相対

的に閉鎖された範囲内に限定し、一般居住者が利用する見るに堪えないトイレと接触する機会を減らす、ということを意味していた。

3. 上から下へ進むトイレの改良運動

トイレ問題は、中国の政治エリートが重視する国家イメージにも関わってくる。したがって、その改良に係る努力は、上層部から働きかけられるものである。1990年代前後、第11回アジア競技大会を機に、開催地北京では景観整備がすすめられ、公衆トイレの増設や改修工事が行われた。1984年から1989年のあいだに同市で新設、改装された公衆トイレは1,300ヶ所以上、下水道との貫通工事が施された浄化槽も1,000ヶ所を超え、これに伴い、公衆トイレの総面積は1.6万平方メートルに拡大、下水口も3,300ヶ所増加、しかも6,000を超える公衆トイレで水洗式トイレの整備が実現した。状況が改善の兆しを見せたものの、決して十分なものではなかった。1993年末までに、北京市の公衆トイレ約57,000ヶ所のうち、環境衛生部署で管理されるものは6,800程度しかなかった。また約7割の公衆トイレが衚衕や居住区に分布し、主要道路や繁華街には200ヶ所あまりしかなかった。当時の国の基準に照らし合わせてみても、北京市の9割の公衆トイレはきわめて簡易的で、第4類に区分されるものだった。仕切り壁もないそのトイレは実質ただの穴が開いているだけであり、その衛生状況はきわめてひどかった[人民網 2015]。

以上のような状況下で、1990年代初頭、中国メディアにはじめて公衆トイレ革命をめぐる議論が登場した。1994年9月、娄暁琪の率いる首都文明工程科研グループが[1]、『北京日報』上で「北京の公衆トイレは革命を急ぐべき」、「多くの障害が行く手を阻む公衆トイレ革命」、「公衆トイレ革命の出口はどこに」等と題する一連の評論を連載し、全国民を動員する公衆トイレ革命の必要性を提示した。1994年7月、同科研グループは『首都都市公衆トイレ設計大会方案』を制定して作品を募り、同年11月中旬までに、全国20を超える省(区、市)、さらにはアメリカやオーストラリアなど諸外国から340の応募が寄せられた。天安門広場で受賞作品の展示会も開かれ、より鮮明に公衆トイレ革命の旗印が掲げられたが、これは当時の北京市民の固定観念に一定の衝撃をもたらすことになった。その後、北京では1995年の第4回世界女性会議や2008年のオリンピックが、また上海でも2010年の国際博覧会などが開催されたが、国家イメージと首都の威厳を守り、表出するという同一の論理に基づき、両市では市民の文明的素養を向上するための活動が展開された。その際、都市部の公衆トイレ問題は最大の試練としてのしかかってきたのである[沈嘉 2004、単・陶 2004]。

2004年11月17日、第4回世界トイレ会議が北京で開催されたが、これは中国において初めてのことだった。当時、北京は2008年までに城区で第2種以上の基準を満たす公衆トイレを全体の9割を占める3,700ヶ所新設あるいは改装し、第3種以下の基準に満たない公衆トイレを使用不可とする都市計画を掲げた。また同計画では、近郊と郊区城鎮で第2種以上の公衆トイレが全体に占める割合を、それぞれ6割と3割まで引き上げるという目標も掲げられた。一方、上海の公衆トイレは北京以上に、不合理な配置、バランスの悪い男女トイレ比、市民の非文明的使用法といった諸問題を抱えている。このため、上海市は現代的な公衆トイレサービスの整備を提起し、投資の増大と管理の強化に力を注ぎ、トイレの市場化した運用システムを模索した。そして北京と上海には有料トイレがあいついで登場し、整った設備に加え、専属の清掃員も配置された。この公衆トイレの市場化は中国の多くの都市で採用され、使用料によって経営管理が維持されているが、程

度の差はあれ、いずれも「収入第一、管理は二の次」といった現象が存在している。だが、公衆トイレの経営モデルをめぐって巻き起こった議論の焦点のひとつこそが、市場化か公益化(無料)か、という点にあった。

国家イメージとよく似たものに地方イメージがある。多くの地方都市もまた、具体的なトイレ改造へ次々と乗り出した。そのうち、2000年に桂林市長李金早が推進した旅行者用トイレ改革、南京市長羅志軍が2003年に提唱した南京公衆トイレ革命、山西省臨汾市の建設局長宿青平が2008年に推進した臨汾公衆トイレ革命などは、よく知られている。2001年、国家旅遊局は桂林で「新世紀の旅行者用トイレの建設と管理」と題するシンポジウムを開催したが、これは中国初のトイレをテーマとした全国会議である。そして同シンポジウムで提出された『桂林共通認識』は、トイレ革命を推進するための中国初の共同宣言となった。その内容は、旅行者用トイレの管理が現代的な基準に達しないかぎり観光業の現代化は真の意味で実現されえないというものであり、桂林の旅行者用トイレ革命では具体的に「政府が推進し、民間企業がトイレを建設、維持管理する」という市場化した手法が採択された。この結果、同市には849ヶ所の旅行者用トイレが建設されるに至ったが、これは観光地に平均1平方メートル毎に5.7ヶ所のトイレが整備される計算になり、国家基準を大きく超過するものだった。トイレ整備と管理の面で後れを取っていた同市のイメージは劇的に払しょくされ、旅行、投資、市民生活のすべての環境が改善された。そして2000年から2015年まで15年におよぶ努力が継続された結果、桂林市では市内の全観光地に旅行者用トイレが普及し、国内外の観光客の桂林に対するイメージを大きく改善するに至ったのである。

2014年、李金早が国家旅遊局長に就任すると、翌2015年初頭には、同局によって全国規模で旅行者用トイレ革命が推進されることとなった。李金早は、旅行者用トイレは小さいながらも観光客の一つの国、民族に対するイメージを決定づけるものであり、国と地方の総合的な実力を表し、また、観光産業および観光事業のさらなる発展に直接関係してくるものだと考えた［李金早2015］。このトイレ革命と文明的ツーリズムについて、2015年4月1日、習近平は細部から着目し、現実的なことから着手し、ツーリズムの品質をたえず向上させるように、書面で指示した。国の指導者から指示を受け、また政府の関連部署に主導されることで、トイレ革命は歴史上はじめて国の文明化プロジェクトの一環に位置づけられることになった。2015年から2017年にかけて、国家旅遊局が推進するトイレ革命は全国に広がり、比較的短い間に、各地方政府でもトイレ革命指導グループが設立された。国家旅遊局による『全国旅行者用トイレ革命の実施に関する意見』も登場したが、これは『旅行者用トイレの質と量の等級区分と評定』の基準を改定した上で、「十分な数量、衛生的で文明的（清潔かつ無臭であること）、利用無料、有効的な管理」という具体的な要求を示すものだった。そして、政府による指導、資金分配、基準設定などを通じて、2017年までに全国で3,300ヶ所のトイレを新設、2,400ヶ所の既設トイレを改装、最終的に観光地、観光路線、交通要所、観光地のレストランや娯楽施設、歩行者天国のトイレをすべて三ツ星以上の基準を満たすようにする、とした［銭・沈 2015］。2016年2月15日、国家旅遊局は『2015年トイレ革命先駆的都市を表彰する決定』を公布し、青島など101の都市(区)がそのトイレ革命への積極的な取組を評価され、表彰された。目下、この旅行者用トイレ革命は、観光地や観光路線から、重点観光都市へと拡大の動きを見せており、さらにグローバルツーリズムという概念に仲介されるかたちで、全国の基層へも広まりつつある。そして上から下へ向けて声高に叫ばれながら大きくうねる社会運動となったのである。

4. 田舎のトイレ改装をめぐる実践

近代以降、中国で行われたトイレ改良運動は、民国時代までその歴史を遡ることができる。当時注目に値するものとして、平民教育協会及び一部大学の知識人たちの努力以外にも、1928年から1937年にかけて開かれた上海市衛生運動大会［鵬善民 2007：134-140］や、1930年代に実践された蒋介石主導による新生活運動を挙げることができるだろう。前者は地方に根差したもので、公道の清潔を維持すること（大小便や痰吐き、ごみのポイ捨ての禁止）を目的としており、一方後者は新しい国民の育成を目指した全国的なものである。両者とも政府主導で実施され、上から下へ向かう強制的な動きは共通しているが、新生活運動は伝統的な道徳（「礼を尊び、儀を重んじ、清く正しく無欲で、恥を知る」）と一般庶民の衣食住行を一体化させようとする試みでもあった。だが、時代の制約もあり、普通の国民生活への影響はきわめて限定的だった。とはいえ、この運動の提示した「新生活の心得」が「清潔」という点を比較的重視しており、トイレの衛生維持管理や立小便の禁止などの具体的な要求を明示したことは記しておくに値するだろう。江西省で実施された際には「公共トイレ改造法」まで規定された。後れを取っている一部項目について検査を行う際にも、公共トイレと室内トイレの衛生問題に触れ、基準に満たないものには改善の勧告も出している［深町 2013：5,111,138、段瑞聡 2006：161］。

中華人民共和国建国後には、政府主導で国民の衛生科学上の素養を向上し、国民の健康を保証しようとする各種取組も行われた。これらは程度の差こそあれ、その多くがトイレの改良と無関係ではなかった。1950年代から1970年代にかけて登場した愛国衛生運動や四害（ハエ、カ、スズメ、ネズミ）撲滅運動、住血吸虫病根絶業務などがその一例である。愛国衛生運動では二管五改という言い方が登場したが、管は水道管と下水管を指し、また改善の対象として井戸、トイレ、飼育柵、竈及び環境の5項目が挙げられた。1990年代には農村部のトイレ改良が『中国児童発展計画アウトライン』と中央政府『衛生改革と発展に関する決定』に盛り込まれ、同時に衛生面を重点的に整備したモデル地域（郷・鎮・県）の建設が行われたことで、農村にもトイレ革命の波が押し寄せるようになった。2002年、中国政府は『農村衛生業務の更なる強化に関する決定』を公布し、引き続き上下水道とトイレの改良を重点に衛生環境を整え、疾病の予防・減少に勤め、文明村あるいは文明鎮の建設を進めるように、農村地域へ要請を出した。さらに2009年、政府は農村のトイレ改良を医療改革の進展を後押しするための重要な公共衛生サービス項目として位置づけた。翌年には農村のトイレ改良を中心とする「全国地方環境衛生清潔アクション」がスタートし、農村における衛生トイレ普及率は飛躍的に向上した[訳注1]。2004年から2013年にかけて、中央政府は82.7億元の資金を農村のトイレ改善に投入し、実際に2,103万戸の農家でトイレの改装が行われた。これにより、2013年末の全国農村衛生トイレ普及率は、1993年の7.5%から74.1%まで上昇した。『全国城郷衛生清潔行動方案（2015~2020年）』ではさらに2015年に75%、2020年に85%という目標も定められている。

2014年10月17日、全国愛国衛生運動委員会（以下、全国愛衛会）は河北省石家庄定正県で開かれた全国農村工作現場推進会において、農村トイレ改良は小康社会の全面的な建設に際し必然的に生じる要求であり、人々の健康水準を引き上げる重要手段でもあるとの認識を示した。同年11月5日に同会は「農村トイレ改良業務の更なる推進に関する通知」を出している。また、2014年12月には、習近平が視察で江蘇省を訪れた際、トイレ問題の解決は、新農村建設の上で象徴的な意味を有しており、その土地に即した下水道管網の建設と農村汚水処理を進め、農民の生活の質を向上し続けるべきと表明した。習近平は2015年7月16日に吉林省延辺朝鮮族州和龍市東城鎮光東

村で実施された農村視察においても、農業の現代化が速度を増すに伴い、新農村建設においてもトイレ革命を推進し、より多くの農民に衛生的なトイレを使用してもらうべきとの更に踏み込んだ認識を示している。これにより、近年来、ほぼ毎日のように各地の農村で行われるトイレの改装(バイオガストイレの推奨、汲取り式から水洗式への改装など)の様子が報道されている。

江蘇省の農村トイレ改良は、全国的に典型的な事例だといわれている。2005年以前から、同省は「トイレ改善普及村」を試験的に建設し、その優れた成果をもって全区の問題改善を促進してきた。2006年以降、トイレ改善に投入される資金も年を追うごとに増え続け、2013年には累計56億元に達した。2013年末までに、同省で衛生トイレへ改装した農家は822万戸、その普及率は56%から94%へ上昇し、そのうち無害化機能を備えた衛生トイレが82%を占めた。また、トイレの改装に成功した江蘇省の農村では、2006年以降、寄生虫が引き起こす疾患の感染率及び消化器系伝染病の罹患率が、それぞれ51.8%と36.7%にまで下がっている。通常、トイレ改装事業は衛生・計画出産関連部署や愛国衛生運動委員会事務局によって主導され、これとは別に農林部署がメタンガス池の建設を、また住宅建設部署が農家の無害化トイレの新設(改装)を、それぞれ管理する。具体的には、村内でトイレ改装のモデルケースを何軒かつくり、集団見学を組織し、農家のトイレ改装への動機づけを行う一方で、同時に技術的なパンフレットを無料配布し、トイレ改装に関わる技術者を養成するという方法がとられる。その汚水処理方法についても、三格式、ダブル穴交替漏斗式、バイオガス式だけでなく、条件を備えている土地においては、汚水の集中型処理が推奨されている。たとえば、江蘇省南部の比較的人口が密集した村では、小型生活汚水処理施設が1ヶ所に集中して建設されており、また、一部の大規模な非農業人口型の町では、郷鎮衛生院及びガソリンスタンド等に無害化公衆トイレも設置されている。国の制定する定義によれば、農村の一般家庭の衛生トイレとは壁、屋根、扉及び窓に囲まれ、2平方メートル以上の面積があり、水洗式か乾式かは問わないが、糞便の無害化処理を行うために地下にメタンガス池が設置されていなければならない、とされる。全国の各省、市、自治区では基準に満たない農村のトイレを徹底的に改良することが求められており、その改良の過程で、地方色豊かなバイオトイレの様式が発展してきている。たとえば山東省の三通メタンガス式、河南省のダブル穴交替漏斗式、遼寧省の楼閣式、江蘇省の三格式などがそうである。こうした様式は大同小異のものであり、その基本的な機能はいずれも排泄物にその場で無害化処理を行うことにある。中央政府と地方政府が力強く主導し、資金を投入しているため、衛生トイレの新設あるいは改装に同意する農家は、資金と技術の両面から援助が得られる。これにより、農村のトイレ改造は比較的順調な進展を見せている。

陝西省は中国西北部の降水量の少ない乾燥地域に属しているが、農村部のトイレは汲み取り式が主流であり、この地域の農村トイレ改良は厳しさに面している[梁錦 2015]。同省には約711万世帯の農家がくらしているが、その内、2015年までにトイレの改装を完了したのは366万世帯、衛生トイレの普及率は52%である。このトイレ改装により、腸管感染症の発症率は2010年の10万人当たり30.25人から2014年の19.50人まで引き下げられた。しかし、陝西省農村部のトイレ改良全体を見てみると、関中、陝北などの地域でダブル穴交替漏斗式トイレの建設にかかる費用が最低2000元、陝南で三つ穴交替漏斗式トイレの建設費用が最低1800元、三格式トイレになると2800元が少なくとも必要となる。ある程度は政府から補助が出るといっても、やはり建設費用の大半は農家自身が負担することになる。『陝西省農村トイレ改良業務「十三五」(2016~2020)計画』で、最終年度の「十三五」つまり2020年までに農村地域の衛生トイレ普及率の85%以上という目標値が承認されているため、同省内の各基層部署は大きな圧力に曝されている。

商洛市丹鳳県は陝西省の中でも発展が遅れている山間地区に属し、その総人口は約32万人ほどである。2006年から2010年にかけて、県内の棣花、鉄峪鋪、竹林関などでメタンガス式トイレを主とする農村トイレ改良モデル実験が実施され、同県は2010年に省、市レベルで決定された「中央重要公共衛生農村トイレ改良プロジェクト」県に名前を連ねている。多方面にわたる努力の結果、現在県内でトイレの改良を完了した農家は5.1万世帯、衛生トイレ普及率は75%、教育機関での普及率は87%まで増加した。2017年7月、丹鳳県は国家愛衛会から「国家衛生県」の称号を与えられが、正にこの「国家衛生県」の創設過程において、同県の衛生状態は大きく改善されたのだった。丹鳳県の公共トイレの分布密度は1平方キロメートル当たり3ヶ所に上り、また、ごみの埋立て地や汚水処理場、し尿処理場などの運営も良好で、汚水、ごみ、し尿いずれも国の処理基準を満たしている。農村部では、水質改良、トイレ改良、竈改良、牧柵改良などの実施により、多くの農民が安全な飲用水を飲むことが可能となり、その上水道普及率は92%に達した。同時に、90%もの農家世帯が電気、ガス、太陽光を主体とする清掃エネルギーを使用している［劉春栄 2017］。丹鳳県の農村トイレ改良の具体的な実践では、トイレ改装特定支出金をプロジェクトで該当する農家世帯に助成するだけでなく、トイレ改良と新農村建設や貧困扶助開発、小集落建設、政策的移住、美しい農村建設、ルーラル・ツーリズムの開発などの諸プロジェクトに関連付けて、多方面からトイレ改良の資金を獲得するという手法がとられている。便器やタイル、水道管、コンクリートなどの建材を無償提供する以外にも、トイレ改造を行う世帯には施工中の休業手当も支給される。また、一方では最大限に農民の意思を尊重し、既設の汲取り式トイレを改装したり、新たに衛生トイレを新設する際には、世帯ごと、トイレごとにふさわしい方策が講じられる。また一方では、すべての衛生トイレに壁、屋根、密閉されたし尿槽が設置され、ハエ・ウジ・悪臭がなく、無害化されていなければならないとする、三有四無と呼ばれる技術的基準が求められる。こうしたトイレ改良は多くの農民に目に見える実益をもたらしたため、現在ではゆっくりではあるがすでに「改良を強いられる」段階から「自ら改良を望む」段階へ移行しつつある。

観光地と中規模以上の都市で行われる公衆トイレ改良は、いかに管理を強化し、投資を増加するかが問題になるが、一方、農村のトイレ改造はつねに農民が当然視する観念と行為の壁に直面している。中でも最もよく見うけられるのは、そんな必要はない、というものである。トイレ改良が比較的順調な地域というのは、経済的に恵まれ、生活環境も整っている農村が多く、農民たちはトイレの改良を前向きに受け入れており、積極的に参加あるいは協力している。そしてトイレ改良事業もまた、農村環境を大きく改善し、人々の幸福感を強めることに寄与している。一部の村では配偶者選択の条件として、男性の家に衛生トイレがあることが挙げられ、仮になければ女性が縁談に応じない傾向が強いという。しかしその一方で、決して少なくない地域、特に比較的貧しく、辺鄙な山間地区では、トイレ改良事業が順風満帆に進んでいるわけではない。農村のトイレ改良の難しさは、住居が分散しているがゆえに集中的かつ連続的な効果が生まれにくいという点以外にも、「人なし、金なし、観念なし」という言い方によく要約されている［史林静 2015］。農村では過疎化が進み、青・壮年層の労働人口は出稼ぎで村を空けている場合が多いが、トイレ改造は土を動かす必要があり、しかも技術などが求められる。したがって、留守を守る老人たちは、これを先伸ばしにしてしまう傾向がある。また、多くの農民が乾式トイレの改造に多くの費用を投じ、手間隙かける価値はないと考えているが、これは観念上の問題である［葛欣鵬 2015］。これとよく似た考え方として、トイレは本来汚いものであり、排泄する場所にそこまでこだわる必要はないというものもある。また、水洗トイレは水道代がかかると頭を抱え、毎年2回のバイオガストイレの清掃に適応できない、と感じる者も少なくない。

5. 発展、衛生および文明：トイレ革命を支えるディスコース

現下の中国人社会で実践されるトイレ革命は、相関的でありながら性質の異なる以下のパーツから構成されている。

（1）都市化の過程における一般家庭の室内水洗トイレの普及
（2）観光地でトイレサービスの質を向上する旅行者用トイレ革命
（3）市政の公共施設として投資の増大と管理の強化が求められる公衆トイレ革命
（4）乾式トイレの改良と無害化処理を施すバイオガストイレの建設を主体とする農村トイレ改造運動
（5）いまだ完全に実現していない、政府機関や企業、公共サービス施設のトイレの一般開放等

異なるパーツのトイレ革命にはそれぞれの特徴があるが、一方で、中国人社会のトイレ革命をめぐる言説をみると、同一の、あるいはきわめて似通った記述が用いられている。まず発展という言説だが、これは社会経済の発展の延長上で、トイレ革命を理解し、またそれを位置づける。たとえば、農村トイレ改良の目標値として、2020年までに集中型給水人口比と衛生トイレの普及率がそれぞれ85%以上と設定されている。これは国内の政治的言説の中で、「2020年全体的な小康社会の実現」という大きな目標の一部を構成する。また、「2015年までに人間と排泄物を衛生的に隔離する施設の普及率を地球規模で75%まで引き上げる」という国連のミレニアム開発目標も参照、引用している。この方面において、中国が国際社会の足を引っ張るわけにはいかないのである。国連プロジェクトとその理念の助けを借りて、中国の農村トイレ改良を実践するというのは、非常に合理的である。中国にしてみれば、発展に関連する諸理念を、欧米諸国から直接借りてくるよりも、国連の関連システムを通じて導入するほうが、より意にかなっているからである。実際、中国農村部のトイレ改良に国内の愛国衛生運動の足跡を見出すことができるが、同時に、国連児童基金が提唱するグローバルなトイレ革命に積極的に応えたこともその背景になっている。中国政府が欧米諸国と人権等の議題をめぐって紛糾を生じる際、発展の権利は人権の最も根幹的な内容と目されるため、中国はこの発展という問題に触れる時、喜んで国連に協力的な態度をとるのである[劉莉莉 2007]。

国際的な動向から鑑みれば、トイレはいぜんとして発達と未発達を区分する最も明確な基準である。中国内陸部のトイレは自らが発展途上国であること、あるいはそうした地域を有していることをはっきりと映し出している。それだけでない。いわゆるトイレ革命は同時に国内の重大な発展問題の一つでもある。長年にわたり、中国は都市・農村間の巨大な発展格差に直面し続けてきた。この都市・農村間格差はトイレ環境の上で最も顕著に、直観可能な形で表現されるため、農村トイレ改良を急ぎ、農村部の衛生状況を徹底的に変えることが、都市との格差を縮めることにつながるのである。また、農民の生活の質の改善や、彼らの幸福度指数の向上等にとっても重要であることはいうまでもない。「小康か小康でないか、トイレがそのバロメーター」という言い回しもあるように、ここ数十年来、農村の発展は目覚しいが、トイレ改良は全体的小康社会の最低ラインをさらに引き上げる重要な措置である。農村トイレ革命は、農村のマチ（城・鎮）化において避けては通れぬ道であり、トイレ改良の成功があってはじめて、農民は都市部の人々と同じように尊厳ある、体裁のよい生活を送れるようになる。すでに世界第2位の経済大国となった中国にとって、観光名所や観光地のトイレと市街地の公共トイレはたしかに重要だが、農村で衛生

トイレを普及させることの方がより重要なのである。

中国のトイレ革命をめぐる二つ目の言説として、衛生化学の言説がある。農村部では特に、人と家畜の排泄物に対する不十分な管理によってもたらされた衛生問題が、改革の最大の理由とされている。長年、農村部で発生した約8割の伝染病が、トイレの糞便による汚染と飲用水の不衛生に起因している。トイレの憂慮される状況が続き、人と家畜の排泄物をうまく管理できないために、このような状況が根本的に改善されることはなかった。中国の一般的な農村には、病理学や細菌学、防疫科学、流行病学といった衛生科学の基本知識はいまだじゅうぶんに浸透していない。「少々汚いものを食べているほうが病気にかかりにくい」、「汚れが目に見えなければ綺麗」といった日常生活の理念を信じて疑わない農民が、いぜんとして多数を占めているのである。21世紀初頭までに、農村のトイレ改良運動は大きな進展を遂げたが、引き続き農村で衛生知識の普及を図る必要がある。ここで指摘しておかなければならないのは、トイレ改良運動の衛生に関する言説は、突然出現したものではない、という点である。それは、中国の基層人口衛生防疫システムの上で長年使用されてきた業務用語でもある。

都市部と農村部、両方のトイレ革命で用いられる言説が文明である。公共メディアと政府が用いる基本的な言説として、トイレ革命は国家の文明プロジェクトと称され、その目的は中国のトイレ文明の基準を引き上げることにあるとされる。また、これと関連する通俗的な表現にも、「物質文明は台所で分かる、精神文明はトイレで分かる」というものがある。多くの男性トイレの便器上部によく書かれている「前に踏み出す小さな一歩、それは文明への大きな一歩」という標語も意味は同じである。政府の基本的な記述においては、新華社の報道に見られるように、「トイレは人類文明を推し量る尺度である」という世界トイレ組織の発起人の観点が引用される。トイレは小さいながらも、全世界共通の嗅覚言語及び視覚言語なのであり、異なる文明を結ぶ最短の直線であり、文明の進化過程を表現するのである［銭春弦 2015］。文明をめぐる言説には、これらを国家と民族レベルで強調するもの、そして個人的なレベルにおいて強調するものとがある。前者はトイレを国家の文明程度を示すシンボルと見なしており、一部のメディアではトイレ文明が欠如した国が世界文明の列に加わることは難しい、とまで言われている。また後者は、トイレ文明を公民の素養の問題として記述する。トイレの良し悪しは国家イメージに係るだけでなく、国民の文明的な素養を表すと考えるのである。例えば、陝西省商洛市は文明的市民に対し、以下の10の行為を禁じている。

1. 場所を問わず痰を吐くこと
2. 場所を問わず排便、排尿すること
3. ごみをポイ捨てすること
4. 無断で張り紙や落書きをすること
5. 無断で物品をぶら下げたり積み上げること
6. 無許可で建築すること
7. 無許可で品物を並べること
8. 赤信号などの交通規則を無視して道路を横切ること
9. 市の施設を壊すこと
10. 公共の緑地や緑化施設などを壊すこと

これに似た取組みはその他の都市でも推進されており、ドイツ人社会学者ノルベルト・エリア

スがいうところの「外的束縛」が日々形成されつつある。こうした規制が、一旦心の審判として人々を監視する「内的束縛」や「自己抑制」へと内面化されると、文明化の過程は日々厳密かつ明確な方向性を生じてゆくことになる［埃利亜斯 1998：251-252］。

しかし、中国では、公的メディアと政府の言説が、自国民に誇りを抱かせるようなもう一つの文明を記述する。たとえば中国は古代文明国家であり、数千年の文明史が途切れたことはなく、中華文明は全人類に大きく貢献した、といった具合である。だが、オリンピックや世界博覧会など、国際社会に向けて国家イメージを表出しなければならない場合、文明をめぐるこうした言説は、時に矛盾を招く結果となる。ここで述べられる文明は一義的なものではなく、一方は古代文明を、もう一方は現代文明を指している。古代中国文明の輝きが、現在の中国社会に現代的な（トイレ）文明が欠落している不体裁さを覆い隠してくれるわけではない。そもそも、このトイレ及び排泄の問題に関して、中国の古代文明は優雅に避けたり露骨な表現を控えるばかりで、誇らしい遺産を残してくれはしなかった。中国は古来より礼儀の邦を自負してきたが、伝統的文化がトイレ問題を歯牙にもかけなかったため、これと真剣に向き合うことができずにいた。もちろん、民族的な自尊感情に富んだ中国人に、西洋（トイレ）文明の基準に照らし合わせて自らの行為を規定させようとしても上手くいかないだろうが［喬治 2009：119］、現実としてトイレが国民生活や国の経済、イメージなどに係る大問題となった以上、文明をめぐる言説も国民を奮い立たせ、現状を変える動力ともなる。中国の誇らしいとは言えない伝統的なトイレ文化にトイレ革命の洗礼を受けさせ、二度と国民に恥ずかしい思いをさせない現代的なトイレ文明にまで成長させること、これは現在の中国社会が全面的な現代化を遂げるうえで、あるいは中国式の言い方を借りれば、全面的な小康社会を構築し中華民族の偉大な復興を実現するうえで、避けては通れぬ道なのだ。別の道を探したところで、他に近道などない。

上述の基本的な言説以外にも、トイレ革命は現代国家の市民社会の公共性の問題とも密接に関係している。市政業務体系の一部を成す都市トイレと下水道処理は、往々にして社会公共システムの基幹となる部分でもある。都市の標準化された公衆トイレとは、市民の需要に応えるものでなければならない。こうしたトイレ文明は明らかに個人が単独で構築できるものではない。そもそもトイレ問題は最初から個人レベルの問題ではなく、政府と社会公共システムがその解決の義務を負っている。政府は市民の用足しが文明的でないと文句を言うよりも、自らの供給側、管理側としての基本的責務を検討し直すべきだろう。中国において、トイレ問題は実際にはより複雑で、深刻な社会構造的問題なのであり、このことは都市・農村格差以外にも、昨今指摘されつつある内部トイレ（関係者用トイレ）によく示されている。1994年、上海市は他所に先駆けて、沿道の企業にトイレを一般開放するよう通知したが、一方の南京市では最近ですら、民生局事務所のビル内で手続きに来た市民がトイレの使用を拒否されるという事例が報告されている［中国広播網 2014］。遺憾なことに、これはけっして稀な事例でない。したがって、各地のトイレ革命には内部トイレの市民への開放を促す内容がしばしば含まれている。公共性の欠如した内部トイレの存在は、中国人社会の多層構造が内と外を区分、隔離する論理によって顕在化されることを示唆するのである。

※本稿の一部資料は2017年8月から9月にかけて陝西省商洛市で行った関連調査により得たものである。この調査は公益財団法人平和中島財団の研究助成により実現した。ここに感謝を申し上げる（平和中島財団アジア地域重点学術研究助成「日中韓・東アジアの生活変化/生活改善運動の比較研究―『日常学としての民俗学』構築のために」）。

注

1　当時、筆者も当該科研に参加していたことがある。

訳注

1　衛生トイレ（衛生厠所）とは、水洗式トイレ、し尿分離型エコトイレ、漏斗式トイレ、ダブル穴交替式トイレや楼閣式堆肥トイレ等の総称である。

参考文献

埃利亜斯、諾貝特 1998『文明的進程―文明的社会起源和心理起源的研究(二)』（袁志英訳)生活・読書・新知三聯書店

奥尼爾、約翰 2010『身体五態：重塑関係形貌』（李康訳)北京大学出版社

阿南透 2010「民俗学視野中的消費」（趙暉訳)，王暁葵、何彬編『現代日本民俗学的理論與方法』学苑出版社

単金良・陶穎 2004「北京将每年新建改造400座公厠 男女空間4比6」『法制晚報』（11月17日）

段瑞聡 2006『蔣介石と新生活運動』慶応義塾大学出版会

深町英夫 2013『身体を躾ける政治―中国国民党の新生活運動』岩波書店

葛欣鵬 2015「厠所革命，一場『習慣』的較量」半島網『半島都市報』（8月19日）

哈里森、丹尼爾・葛学溥 2006『華南的郷村生活―広東鳳凰村的家族主義社会学研究―』（周大鳴訳)知識産権出版社

梁錦 2015「農村『如厠』難？陝西将掀起一場『旱厠』革命」人民網(11月20日）

李金早 2015「旅遊要発展，厠所要革命」中国経済網『経済日報』（3月19日）

劉春栄 2017「丹鳳実施五大工程改善生態環境」『商洛日報』（5月5日）

劉莉莉 2007「世界厠所峰会代表称使用不潔厠所侵犯人権」『新聞晨報』（11月5日）

娄暁琪 2015「我所親歴的『所革命』」『人民日報(海外版)』第8版(8月1日）

鵬善民 2007『公共衛生與上海都市文明(1898-1949)』上海人民出版社

銭春弦 2015「握緊『文明尺度』、改造『方便角落』―就『旅遊厠所革命』專訪国家旅遊局局長李金早」新華網(3月18日）

銭春弦・沈陽 2015「我国今年将開展旅遊厠所革命」新華網(1月15日）

喬治、羅斯 2009『厠所决定健康―糞便、公共衛生與人類世界』（呉文忠、李丹莉訳)中信出版社

人民網 2015「中国『厠所革命』的30年故事」『人民日報(海外版)』8月1日

沈嘉 2004「世界厠所峰会在京開幕 京濾承諾厠所発展規規劃」中国新聞網(11月17日）

史林静 2015「中国農村的『厠所革命』」『新華每日電訊』（7月27日）

許烺光 1997『駆逐搗蛋者―魔法・科学與文化―』台湾南天書局有限公司

楊懋春 2001『一个中国村庄：山東台頭（A Chinese Village―Taitou,Shangtung Province)』（張雄、沈煒、秦美珠訳）江蘇人民出版社

英格利斯、戴維 2010『文化與日常生活』（張秋月、周雷亜訳)中央編訳出版社

中国広播網 2014「南京一民政大楼厠所装密碼鎖 回応称上厠所的太多」『中国広播網』11月6日

仲富蘭 1990『現代民俗流変』上海三聯書店